（様式２）

令和４年度佐賀大学研究者国際交流支援事業報告書

令和　５年　３月　15 日

国際交流推進センター長　殿

事業責任者（申請者）
所　　属　芸術地域デザイン学部
職　　名　准教授
氏　　名　三木　悦子

下記のとおり令和４年度佐賀大学研究者国際交流支援事業の実施結果について報告します。

1.国際研究集会名	ベツァルエル美術デザインアカデミーとの共同教育研究・および課題発表セミナー		
2.事業責任者 （申請者）	三木　悦子 田中　右紀	三木　悦子 田中　右紀	三木　悦子 田中　右紀
4.開催期間	令和　４年　11 月　22 日　～　令和　５年　５月　30 日 オンライン発表会：令和　５年　２月　27 日 合同展覧会開催予定：令和　５年　４月　４日　～　令和　５年　５月　30 日		
5.申請区分	C）一般		
6.参加者数 ※参加者名簿（別添）を添付	参加者数　27　名 内、外国人数　13　名、研究者数　5　名、 学部学生数　19　名、修士以上学生数　　名		
7.招待講師	所　属 職　名 氏　名		
8.支出額	金　額　　円 【内訳】 謝金　24,000　円 旅費　　円 消耗品費　176,000　円		
9.国際研究集会の内容			
このプロジェクトは、令和3年度より行なっている佐賀大学芸術地域デザイン学部有田セラミック分野とイスラエルのベツァルエルデザイン美術アカデミーのガラス・セラミック専攻との教育・研究交流の第二			

ステージである。

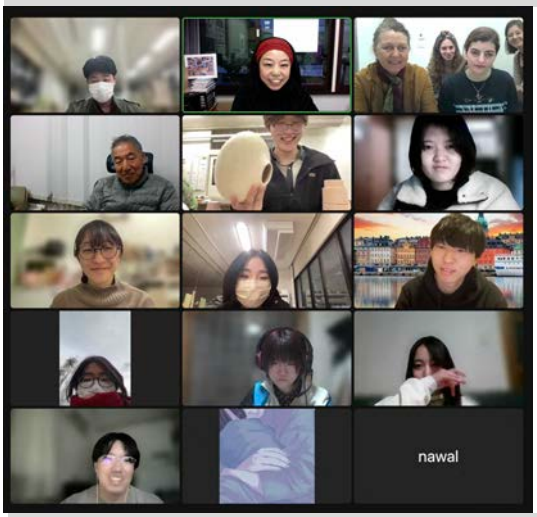
令和3年度は第一弾として、互いに異なる歴史と文化の背景を持つ創造の交流を通して、相互理解や互いの創造活動への刺激を得ることを目的に、「おばあちゃんのカップ」プロジェクト行った。両校の学生と教員でこの課題を行うことで、互いの生活、文化、歴史、地域性を考察する中で、「器」を規定しているものを考えていく内容である。ベツァルエルデザイン美術アカデミーのジャパン・デザイン・ウィークに合わせて、ベツァルエルデザイン美術アカデミーギャラリーと有田キャンパスのエントランスギャラリーを繋いだ課題のオンライン発表会と、展覧会を同時開催した。またこのプロジェクトは東京六本木のミッドタウンデザインハブ「ゼミ展2023」にも出展し、選抜された全国11大学と共に令和5年1月10日～2月12日まで発表した。

令和4年度はこの交流継続の第二弾として、11月より、同課題『Story Box』をテーマに、オンラインで顔を合わせ、両校学生がペアまたはグループとなって『箱にまつわるストーリー』を話し合った。以下①～④が研究交流のミーティングの様子であるが、各ミーティングの合間には学生が個々でコンタクトを取り、ディスカッションを行っている。研究課題発表会では各ペア／グループがこれまでのディスカッションから得られた共通コンセプトやキーワードを基に、それぞれが扱っている素材を用いて実際に制作を進め、作品を発表した。オンラインでの最終研究発表会では各ペア／グループが共通コンセプトやキーワードから表現された作品、その考えの源や過程、創造の観点、技術的手法を共有した。その後、それぞれの作品を両校に送り合い、実際に制作品に触れ、実物を確認し、両校ギャラリーで合同展覧会を開催する予定である。

①11月22日：”Story Box” プロジェクト 1st zoom オンラインミーティング

②12月13日：”Story Box” プロジェクト 2nd zoom オンラインミーティング　進捗発表

③1月24日：”Story Box” プロジェクト 3rd zoom オンラインミーティング　進捗発表



④2月27日：”Story Box” プロジェクト 4th zoom オンラインミーティング　研究課題発表会

⑤4月4日～5月30日：両校ギャラリーでの合同展覧会開催

各ミーティングの合間には学生が個々でコンタクトを取り、ディスカッションを行った。研究課題発表会では各ペア／グループがこれまでのディスカッションから得られた共通コンセプトやキーワードを基に、

それぞれが扱っている素材を用いて実際に制作を進め、作品を発表した。オンラインでの最終研究発表会では各ペア／グループが共通コンセプトやキーワードから表現された作品、その考えの源や過程、創造の観点、技術的手法を共有した。その後、それぞれの作品を両校に送り合い、実際に制作品に触れ、実物を確認し、両校ギャラリーで合同展覧会を開催する予定である。

10.事業実施による成果・今後の事業の発展等

学生らは共に母国語としない言語である英語を用いて交流を行ったが、それ故に相手の思考を理解しようと努力し、また「芸術表現」という、創造分野の学生特有の共通言語を用いて相互理解を深めた。初めは英語での交流や異文化交流といった普段取り組むことのない研究交流に苦手意識を持つ学生が多く、ミーティングもぎこちなさが目立ったが、徐々に交流そのものやその表現の手法を学び、これまで全く知る機会のなかったイスラエルという国への理解はもとより、異文化間交流への足掛かりとなり、自信に繋がったことが確認できた。回を重ねるごとに「箱」への個人的な思いや考えへの理解が深まり、ディスカッションから得られたキーワードをもとに、ベツァルエルと有田の学生がそれぞれ思う「箱」を創り出し、同世代の共通した若い息吹のようなものが感じられた。

2月27日の研究課題発表会では、有田町が運営しているクリエイティブ・レジデンシーで滞在制作をしているイスラエル人アーティストで、ベツァルエルデザイン美術アカデミーのヴィジュアルデザイン卒業生であるタマール・モーゲンドフ氏をオブザーバーとしてゲストに迎え、学生の発表にコメントしていただいた。卒業生として、またプロのアーティストとしての学生らへのコメントは学生らにとっても貴重な時間となり、さらに有田とベツァルエルの将来の架け橋として非常に有効な役割を担っていただいた。

この研究成果を大学内や地域にも発表するために両校学生の作品を相互に送り合い、到着後、令和5年度4月4日から両校のギャラリーで合同展覧会を開催する予定である。

これらの交流を通して、同じ課題によるアイデア・コンセプトを共有した両校学生ペア／グループの、制作品による表現の違いを表出させ、第一弾として行った観点に加え、両校それぞれの持つ教育の特徴を確認することができた。

今後は教授陣が実際に大学を相互に訪問して教育・研究交流を行い、大学間の学術協定等も視野に入れた将来的に継続できる交流の可能性を検討したい。

※欄内に収まらない場合、適宜、行を追加し、ページを増やしていただいても構いません。